

明治期における「陶彫」の創始とその後の展開に関する研究 —寺内信一と沼田一雅の比較を中心として—

A Study on the Origin of 'Tocho' in the Meiji Era and its subsequent development

— Through Comparison of Two Key Sculptors in Terracotta: —

Shinichi TERAUCHI and Ichiga NUMATA —

西村 佳菜子

Kanako NISHIMURA

崇城大学大学院芸術研究科博士後期課程芸術学専攻
Doctoral Course, Graduate school of Art, Sojo University

はじめに

我が国における陶を用いた造形は、古代の呪術や地母神信仰用の土偶に端を発し、続いて古墳時代における葬送儀礼用の生き物や器財を象った埴輪や、中世の信仰主題の狛犬等を経て、近世では仏教主題の陶作品や、香炉や置物へと展開、発展していった。さらに、近代における西洋の美術教育制度や美術・芸術の諸概念、諸技法の導入によるあらゆる面での急速な革新、展開期を経て、現代では窯芸家が陶土を用いて立体の具象作品やオブジェを制作したり、彫刻家が作品の素材として陶土を用いたりすることは珍しいことではなくなった。つまり、陶工と呼ばれる職人だけでなく、芸術家がジャンルを超えて表現の1素材として陶土を使用するようになったと言える。それは、生き物の生と死の還元を象徴する「土」を用いて作品を制作するという行為や、人間の技術だけでなく、「火」という自然の要素が加わることによって作品が完

成される過程に意義を見出しているからである。そして現在、陶土の特性や特質が活かされた優れた立体作品は数多く存在し、日々生み出されてもいる。また、そうした状況と併行して、現在の日本の窯芸界や美術界では、陶土を素材として制作された彫刻作品やオブジェを指す言葉として、「陶彫」という用語を当てることが一般化していると言える。

筆者は、彫刻制作者として陶彫制作を幾度か経験する中で、素焼きされた陶土が呈する茜色や紅樺色、炭化した煤色等の多様な色調や、施釉された作品のガラス質の表面がもつ独特の柔らかな肌合いに魅了された。また、それと同時に、窯芸技法や素材に関する深い知識なしには、自身の完成予想像に近づけるのが困難であることにも、逆に醍醐味を感じた。そして、現代作家の陶彫や陶土を素材としたインスタレーション作品を数多く観る中で、作品の素材としての陶土の可能性は極めて大きいと確信するようになった。以上のような自身の経験

から、筆者は「陶彫」に興味を覚え、長い歴史的展開を見せた「陶」が、「窯芸」において、呪術や信仰、葬礼、茶道、装飾といった目的から離れて純粋に作品の素材として使用され始める時期や、その転換が何に起因しているのかについて、また、「陶彫」という用語がいつ誰によって使用され始めたのかについて次第に疑問を持つようになった。しかし、それらの問題は未解明であるどころか、「陶彫」に関する研究自体が皆無に近いことが分かった。

そこで筆者は、本論文において、以下の構成に従って、未解明の「陶彫」の創始者が誰であり、何故、またいつ陶彫が創始されたのかを解明するとともに、現在幅広く使用されている「陶彫」という用語の定義を試み、さらに開始期から現在に至るまでの展開を寺内と沼田の弟子や孫弟子、日本陶彫会会員の作品の概観を中心に跡付けることで、今後の彫刻制作者、研究者として筆者がとるべき方向性を見極めることにした。

I. 明治初期までの日本における陶作品ないしは陶製品

まず、I章では、後章における「陶彫」の創始と創始者に関する検証の前提として、古代から明治初期（紀元前2000-1912年）にかけての窯芸の発展、展開を、主に再現対象（主題）をもった陶による形象品の主題や素材、技法、造形、使用目的、造形性等の時系列的概観と、表を用いた分析、並びに愛知県瀬戸市と豊田市の寺院での現地調査によって明確化することを試みた。

そしてその結果、陶の形象品は、窯芸全般の発展、展開を反映しながら展開し、古代では地母神信仰用の土偶や葬送儀礼用の埴輪、呪術用の形代^{かたしろ}、三彩技術を用いた仏教儀式用の形象品、次いで中世では陶工による独創的な形体の狛犬（図1）、続いて近世では主題の形態や固有色の再現を試みた鑑賞性を重視した置物や香炉等が制作され、幕末になるとさらに宗教や伝説上の人物、僧侶（図2）の肖像等が制作され、その傾向は、開国から明治初期に至るまで継続されたことが明らかとなった。しかし筆者は、それらを従来の型や像容を出ない、工芸的で前近代的な作品と結論付けた。



図1 《灰釉狛犬 呷》
陶 15世紀 愛知県陶磁美術館



図2 仁阿弥道八《色絵竹隠和尚坐像》
陶 1831年 大中院



図3 有田工業学校校長時代の寺内信一

Ⅱ. 明治期の日本における新傾向の 陶作品—寺内信一の功績と作 品・先行研究・弟子—

次いでⅡ章では、本論文で掲げた問題点の解明の鍵を握ることになる、明治期に西洋彫刻の影響を受けて「陶土を素材とした彫刻」を制作するという、前近代と近代を隔てる新しい試みを開始した2人のキーパーソンのうちの1人で、生年の早い寺内信一（1863-1945年）（図3）を取り上げた。

そして彼の生涯や功績、先行研究、彼自身と弟子達の作品を、有田や常滑、砥部の窯元や資料館、教育施設での現地調査や文献収集によって得た情報を概観、分析することで、寺内は工部美術学校で学んだ西洋彫刻の技術や特徴を、明治17（1884）年に初めて陶土に応用し（図4）、その後も同

校教員であったV. ラグーザ（1841-1927年）の白い大理石彫刻（図5）の影響が看取される陶による具象彫刻を制作したことや、彼の直接の弟子である平野霞裳は寺内の作品の特徴である写生を基本とする作風に影響を受け、同じく弟子の樋渡陶六は寺内の単色（白色）による写実的な具象表現（図6）といった諸点を受け継いでいること、さらに常滑美術研究所と常滑陶器学校時代の関係者作品を概観することで、寺内らが指導した彫刻技術が関係者間に共有され、吸収されていったことを明らかにした。また、彼に関する先行研究は僅少である上、言及のある論考中でも彼の位置付けは「ラグーザの生徒」や「諸教育施設の教員」、「明治初期の西洋彫刻制作者」に留まっていることを解明した。



図4 寺内信一《裸婦像》
陶 1884年 常滑市



図5 ラグーザ《西洋少女像》
寒水石 1879-82年 個人蔵



図6 樋渡陶六（原型）松本秀雄（成形）
《三番叟》天草陶石 昭和期 陶六窯

Ⅲ. 明治期の日本における新傾向の 陶作品—沼田一雅の功績と作 品・先行研究・弟子—

続くⅢ章では、もう1人のキーパーソンであり、後代に「陶彫の父」や「陶彫の創始者」と評されることになる沼田一雅（1873-1954年）（図7）を取り上げ、福井県陶芸館や東京工業大学博物館での調査結果を基に、Ⅱ章と同様に、彼の生涯と功績、先行研究、彼自身と弟子達の作品の概観、分析を行った。

その結果、沼田は東京美術学校彫刻科教授の竹内久一に伝統的な木彫を、同校教員の岡崎雪声に蠟型鑄造を学び、明治33（1900）年開催の巴里万国博覧会を実見した京都の陶工、錦光山宗兵衛からの依頼で



図7 沼田一雅



図8 沼田一雅《猿》
陶 1905年 東京藝術大学



図9 船津英治《牛》 陶 福井県陶芸館

寺内より16年遅い明治33年から陶土を用いた彫刻制作を開始したことや、一時帰国したことはあったものの、セーヴル製陶所に9年間もの間国費留学して、石膏型取り法や押型法、仕上げ法、窯詰法、焼成法等を学んでから官展第4部に陶作品を発表し始めたこと、さらに「日本陶磁彫刻作家協会」（1938年）や「日本陶彫会」（1951年）を設立したことが分かった。また、沼田の作品（図8）の特徴としては、留学以前は仏教的または純日本的な主題、留学以後は注文品以外はほぼ動物主題であり、細部まで丁寧に造形する作風であることが挙げられた。さらに彼の直接の弟子である小川雄平と船津英治は、沼田と同じく動物を主題とした作品を多数制作し（図9）、官展第4部で発表を行っていたことを明らかにした。

IV. 「陶彫」の創始者と開始時期再考

続くIV章では、本論文で掲げた問題に結論を出すため、Ⅱ、Ⅲ章における概観、分析結果を基に、2人のキーパーソンである寺内信一と沼田一雅を諸点から比較、分析し、併せて結果を表1に整理した。その結果、後代に2人に対する評価の差が生じた理由は、支援者の有無や作品数、弟子の社会的地位等にあること、また明治期における「陶彫」の真の創始者、創始期は、それぞれ寺内信一、明治17年であると結論づけた。また、併せて、先行研究者による「陶彫」の諸定義を表2に纏めて紹介、分析し、筆者自身の「陶彫」の定義を、「明治10年

代後半以降に西洋彫刻の影響を受けて制作された、施釉や着彩の有無や技法には拘らない、陶土で成形し焼成した彫刻（塑造）作品」とした。

なお、陶土を素焼きした塑造作品は日本でも総称して「テラコッタ」と呼ばれているが、同用語は元来「焼いた土」を意味するイタリア語（Terracotta）であり、塑像のほか建築装飾や瓦、煉瓦等をも包含している。さらに、ルカ・デラ・ロbbie（1400-81年）等の施釉した塑像作品も、解説では「Terracotta invetriata」（釉薬をかけたテラコッタ）と表記されていることから⁽¹⁾、「テラコッタ」の用語は施釉の有無には関係なしに用いられていると考えられるため、本論文では「テラコッタ」と「陶彫」の関係を図10のように捉えた。

V. 大正期以降の「陶彫」の展開

最後のV章では、大正期以降の陶彫の現

在までの展開と沼田一雅が意図した日展（帝展、新文展含む）における陶彫部門の確立の有無の問題について確認した。まず前者は、寺内と沼田の弟子や孫弟子の作品並びに日本陶彫会の出品者や彼らの出品状況を、常滑の寺院や有田の窯元における現地調査と、日本陶彫会ホームページ掲載の出品者一覧の概観、分析によって、また後者は、『日展史』等の文献の概観、分析によって明らかにした。そして、寺内と沼田の作品の特徴はそれぞれの弟子達に受け継がれていることや、沼田が設立した「日本陶彫会」の出品者は、昭和49年開催の第24回日本陶彫展までは官展である日展関係者による参加が多かったが、徐々に在野の団体関係者による割合が増えたことを解明した。その他、同会の抱える問題点の明確化と、筆者が考えるその解決策の提示を行うとともに、官展における陶彫部門については遂に確立されず、今後も確立は難しいと結論付けた。

「テラコッタ」と「陶彫」の関係

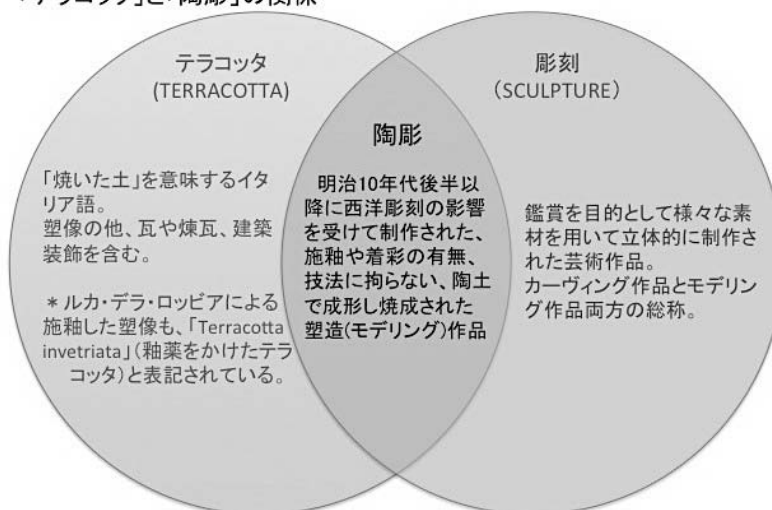


図10 「テラコッタ」と「陶彫」の関係

おわりに

本論文では、日本における長い窯芸の歴史と、明治期における西洋彫刻の日本への導入の中で、明治期に陶土を素材とした焼成による彫刻（塑造）を制作するという新しい試み（後に「陶彫」と呼ばれる）が、生年が僅か10年しか変わらない2人の人物によって開始され、生年が早い人物は今なお無名であるにも拘らず、いま1人は後年「陶彫の父」と呼ばれ、高い評価を受けるようになった理由や、「陶彫」の真の創始者がいずれであるかを主な解明点に掲げ、現地調査や聞き取り、文献調査を基に解明を行い、所期の目的は概ね達成出来たと思われる。

しかし、今後の課題も既に見えてきている。例えば、本論を纏めている中で、明治10（1877）年にドイツのライプツィヒ博物館から東京国立博物館に贈られた陶土成形、焼成による肖像彫刻が数点保管されていることが分かったが、これらの作品が明治期に展覧されていたとすれば、寺内や沼田がそれらを目にした可能性はあり、その経験が日本における「陶彫」の開始に影響を与えたことも十分考えられるため、今後も補足的調査研究が必要と言える。また、沼田が留学したパリ市内の諸美術館には、陶土を素材とした象形作品が数多く展示、収蔵されているが、沼田の作品に与えた影響を明らかにするのに欠かせないそれらの調査は、遺憾ながら未着手の状態にあるため、今後、海外でも調査を行う必要があると言える。

筆者は、有田や常滑、犬山、福井、砥部、

東京で作品調査や文献収集を行う中で、多種多様な窯芸技法にも出会い、それらの技法から多くの刺激を受けた。それらの技法や刺激は、今後、筆者が陶彫を制作していく中で、表現の幅を広げるのに必ずや大きな示唆を与えてくれるに違いない。今後多くの窯業地に足を運び、技術や知識を吸収し、制作の糧としていきたいと思っている。

[脚註]

- (1) A cura di Giancarlo Gentilini, *I Della Robbia e l'arte nuova della scultura invetriata*, Giunti Gruppo Editoriale, Firenze, 1998.

[参考文献]

多数にのぼるため、ここでは割愛する。

[図版・表典拠]

- 図1：愛知県陶磁資料館『陶磁のこま犬百面相』愛知県陶磁資料館 2005年 28頁
図2：サントリー美術館編『天才陶工 仁阿弥道八』サントリー美術館 2014年 141頁
図3：金岩昭夫提供
図4、6、10：筆者撮影、作成
図5：古田亮ほか『明治の彫塑 ラグーザと萩原守衛』芸大美術館 2010年 45頁
図7：渡部智『沼田一雅遺作展』福井県陶芸館 1977年 47頁
図8：東京藝術大学提供
図9：福井県陶芸館提供
表1、2：筆者作成

表1 寺内信一と沼田一雅の生涯の比較

寺内信一	比較内容	沼田一雅
文久3（1863）年～ 昭和20（1945）年（82歳）	①生没年（享年）	明治6（1873）年～ 昭和29（1954）年（81歳）
工部美術学校彫刻学科卒業／渡 航経験なし	②学歴／渡航経験	美術学校等での修学歴はない。 但し、父親は陶芸家／渡航経験 （フランスのセーヴル他欧州 国）あり
カペレッティに幾何学、論理影 法、遠近法、ラゲーザに塑造や 石膏技法、大理石の彫法、玉越 公平に解剖学を学ぶ	③受けた教育・教授内容	竹内久一（東京美術学校彫刻科 教授）に木彫、岡崎雪声に蝋型 鑄造を学ぶ
皇居御造営局に入営するが、短 期間で失職。常滑の窯元の技師 となる	④就職先	東京美術学校鑄金科助手。その 後助教授に昇進
常滑で輪積み法、石膏型込め法、 有田で有田式焼成法	⑤社会に出てから習得した諸技 法	セーヴル製陶所で石膏型取り法、 押し型法、鑄込み法、仕上げ法、 窯詰め法、セーヴル式焼成法
常滑美術研究所で「陶」に出会 い、「陶彫」制作開始	⑥「陶彫」制作のきっかけ	パリ万博を見た人物からの依頼 で「陶彫」試作開始
窯業地での陶芸教育、各地の窯 業史研究	⑦功績・業績	東京美術学校と陶磁器試験所での 塑造指導、フランス政府から 芸術勲章授与
地方の教員や陶芸家として活動 （平野六郎、樋渡陶六等）	⑧弟子	東京美術学校教授や帝展作家と して活動（津田信夫、小川雄平、 船津英治等）
人物と仏教主題の作品	⑨作品の特徴 （主題）	大小様々な動物や肖像、仏教主 題の作品
白土に透明釉を掛けて焼成、あ るいは赤土や白泥土を素焼き	⑩作品の特徴 （素材）	留学前はブロンズ、留学中は白 土の素焼き、留学後は彩度の低 い釉薬を掛けたもの
現存するのは15点（寡作）	⑪陶彫作品の遺例	管見の限り100点（多作）
記録なし	⑫公募展等への出品	帝展、新文展第4部へ出品
記録なし	⑬作家協会設立	日本陶磁彫刻作家協会、オリエ ンタルデコラティヴ研究所、日 本陶彫会を設立

表2 美術・工芸批評における「陶彫」という用語の使用の開始時期や定義、表現のヴァリエーション

発表年月	文献名	執筆者	「陶彫」の呼称・定義
大正12年	「沼田一雅氏の陶器」『中央美術』	畑正吉	「陶器」
昭和2年	『美術新論』	高村豊周	「陶器」
昭和4年	『美ノ國』	鈴木重夫	—
昭和6年	『美術新論』	高村豊周・海野清	—
昭和8年	『アトリエ』	大島隆一	—
昭和10年	「沼田一雅論」「汎工芸」	柴崎風岬	—
昭和12年	『回顧七十年』	正木直彦	「陶器彫刻」「陶像」
昭和12年	『美ノ國』	広川松五郎	—
昭和13年	『美ノ國』	渡辺素舟	—
昭和13年	『美ノ國』	大島隆一	—
昭和14年	「日本陶磁彫刻作家協会 目録」	沼田一雅	「陶彫」
昭和15年	「少年時代の沼田一雅」『汎工芸』	宮永東山	—
昭和26年	「第一回 日本陶彫展」	日本陶彫会	「陶彫」
昭和37年	『京焼百年の歩み 第1』	藤岡幸二	「陶彫」
昭和50年	「八木一夫論」『現代の陶芸 第十二巻』	乾由明	「陶器彫刻」、「陶彫」
昭和52年	「明治・大正・昭和の陶芸家」『現代の陶芸 第一巻』	吉田耕三	「陶彫」
昭和52年	『沼田一雅遺作展』	渡辺智	「陶彫」
昭和52年	『沼田一雅遺作展』	吉田耕三	「陶彫」「純彫刻的な造形観念を基盤とした陶彫」
昭和52年	『沼田一雅遺作展』	北村西望	「陶彫」
昭和53年	『原色現代 日本の美術 第15巻 陶芸（1）』	鈴木健二	「陶彫」
昭和56年	『視る』	福永重樹	「陶彫」
平成3年	『現代陶芸の系譜』	乾由明	「陶磁彫刻」「陶彫」
平成3年	『近代陶芸のモダニズム』	金田雅成	「陶磁器彫刻（陶彫）」「陶製彫刻を意味し、早くからヨーロッパで発達していた技術を沼田一雅が日本に紹介した。彫刻の塑造技術により成型したものから、中の粘土を抜き出して素焼きし、釉をかけて焼きあげる」
平成4年	『工芸家たちの明治維新』	大阪市立博物館	「陶彫、すなわち陶磁器を素材とする彫刻」

平成5年	『アール・デコ様式のセーブル磁器展』	東京都庭園美術館 学芸課	「磁器による彫刻」
平成7年	「近代陶芸列伝」『季刊 陶磁郎』	山崎剛	「陶磁彫刻」、「陶彫」「陶磁彫刻とは「陶磁器を素材とする彫刻」のこと。沼田は略して「陶彫」と称した」
平成10年	『京都の工芸－伝統と変革のはざまに』	京都国立近代美術館 学芸課	「陶彫」「陶磁彫刻」
平成10年	『博士の肖像』	木下直之	—
平成12年	『万国博覧会と近代陶芸の黎明』	愛知県陶磁資料館	「陶磁器彫刻（陶彫）」
平成14年	「国立セーヴル陶磁器製造所における沼田一雅の陶彫受容」『明治・大正期における図案集の研究：世紀末デザインの移植とその意味』	北村仁美	「陶彫」「陶磁器彫刻」
平成15年	「再考・近現代の陶芸家 沼田一雅」『炎芸術』	唐澤昌宏	「陶彫」「一般的には、陶土または磁土を用いて成形し、焼成の過程を経てつくり上げられた彫刻作品、あるいは用途を持たない立体造形的な陶芸作品を指す」
平成16年	『〈彫刻〉と〈工芸〉近代日本の技と美』	村上敬	「陶彫」
平成19年	『京焼多彩なり－明治から昭和へ』	岡本隆志	「陶彫」「陶彫」とは陶磁による彫刻のこと」
平成20年	「沼田一雅について－陶彫家の顔・彫刻家の目～石川県との係わりを併せて－」『石川県立美術館紀要第19号』	北澤寛	「陶彫」
平成21年	「沼田一雅について（その二）～沼田一雅関係資料（沼田関係書簡）を中心に～」『石川県立美術館紀要第20号』	北澤寛	「陶彫」
平成21年	『東京工業大学百年記念館収蔵資料目録 陶磁器コレクション』	東京工業大学百年記念館	「陶彫」
平成21年	『ジャパニーズ・デザインの挑戦 産総研に残る試作とコレクション』	佐藤一信	「陶磁彫刻」
平成21年	『ジャパニーズ・デザインの挑戦 産総研に残る試作とコレクション』	仲野泰裕	「セーブルのやきもの（陶彫）」
平成22年	『近代日本彫刻集成 第一巻 幕末・明治編』	齊藤裕子	「陶彫」「陶磁器と彫刻を融合した新たな表現形式」

平成24年	『近代日本彫刻集成 第二巻 明治後期・大正編』	本橋浩介	「陶彫」
平成26年	『銅像時代』	木下直之	—
平成26年	『陶彫ってスバラシイ』	福井県陶芸館	「陶彫」
平成26年	『陶彫 愛らしさ魅力 沼田 一雅ら作品展』	朝日新聞	「陶彫」「陶彫とは焼き物彫刻 のこと」
平成26年	『「陶彫の父」沼田一雅 伝統 から前衛への橋渡し役』	福井新聞	「陶彫」「焼き物による彫刻表 現」

